

第 27 回 歴史リレー講座「考古学から見た法隆寺の創建と再建」 前園 実知雄氏 (H28.12.18)

法隆寺を創建した聖徳太子は、私たちが学校の授業で習った頃とは異なるイメージが最近の研究で明らかになってきています。605 年、推古天皇の補佐役という絶頂期にも関わらず、太子はなぜ飛鳥から斑鳩に新天地を求めたのでしょうか。一般には仏教研究のため政治の世界から離れたと解釈されていますが、実際は当時中国に敷かれていた律令政治を取り入れるために積極的に進出したと考えられます。斑鳩は飛鳥に比べ、大和川を通じて海外文化をスムーズに取り入れられる土地だったからでしょう。

さらに、北方に矢田丘陵を控え、近くに大和川が流れる斑鳩は中国の風水思想に叶った場所です。5 世紀に導入された風水の考えは、「人が住む場所は風と水の流れに叶った場所が良い。すなわち前方と東西が開け、川が流れ、後方は山懷に抱かれる土地である」というもので、太子が選んだ斑鳩はこの理想に合致します。太子の目的は、難波に近いという斑鳩の地の利を生かし、豪族の力関係に左右されない国づくりを押し進めることでした。しかし、念願の律令制度が実現（701 年）したのは死後 80 年も経ってからです。

法隆寺略年表によると、厩戸皇子（聖徳太子）の誕生は 574 年。593 年に皇太子となり、595 年には高句麗から帰化した僧、^{えじ}惠慈に師事。601 年に斑鳩宮を造営し、4 年後には飛鳥から住まいを移します。606 年に「太子、法華経を岡本宮に講じて水田を賜り、これを斑鳩寺に施入」とあり、初めて斑鳩寺（元の法隆寺）の名が見えます。初期の飛鳥時代の寺は、蘇我稲目が自宅に初めて仏像を祀った（捨宅寺院）ことに始まります。岡本宮ものちに^{ほうきじ}法起寺へと姿を変えたので、寺の下層には確実に岡本宮が残っているはずですが。そして 607 年には法隆寺が完成、小野妹子を隋に派遣とあります。妹子は皇帝から国書を託されるのですが、帰国後「百済で盗まれた」と報告しました。内容が芳しくなかったため苦しい嘘をついたと考えられます。

ところで、30 年ほど前に斑鳩で発掘された藤ノ木古墳の年代は、明らかに太子の移住前です。実は斑鳩という地名は文献にはほとんど現れませんし、地名の由来も不明です。他地域に比べて古墳もさほど多くありませんが、注目すべきは法隆寺西の住宅内にある春日古墳でしょう。法隆寺創建以前の古墳と推定され、盗掘された形跡はありません。斑鳩町による本格的な発掘調査もようやく決まりました。調査の結果次第では、法隆寺や藤ノ木古墳との関連性も浮かび上がってくるかもしれません。

622 年に太子が亡くなり、623 年にはその後を追うように惠慈が亡くなります。同年、太子のために金堂釈迦三尊像が建立。日本で最初に仏像を造り始めた^{くわつくりのとり}鞍作止利仏師による作で、日本最古の金堂仏と言われます。彼の姓から推し量られるように、馬具（鞍など）作りの技術が仏像に応用されたわけです。実際、法隆寺の天蓋には馬具の装飾のような部分が見られます。

643 年、蘇我入鹿の襲撃により太子一族は全滅。650 年から 666 年にかけては法隆寺内には次々と仏像が造られ、活気にあふれていました。ところが 670 年、法隆寺は焼失。672 年には壬申の乱が起こるなど、きわめて不穏な空気に包まれた世の中でした。それでも法隆寺再興の動きが盛んになり始めたのは 682 年頃からで、平城遷都翌年の 711 年には再建法隆寺が完成しました。

では、再建法隆寺は誰が完成させたのでしょうか。確定させるのはとても難しいことですが、当時の天武・持統天皇が援助したことは間違いないと思われます。文化的先進地であった斑鳩には多くの渡来系氏族が定住していました。また、現存する『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（財産目録のこと）によると、法隆寺の荘園は 46 か所もあり、近江、河内、摂津、播磨、備後、讃岐、伊予と広範囲に及びます。ちょうど瀬戸内海を囲んだ格好です。荘園と法隆寺式軒瓦の分布図を見ると双方が重なっているため、関連性があると思われる。法隆寺の再建に関しては、天皇・渡来系氏族・荘園の関係性のなかで解明していく必要があるでしょう。

考古学から見た法隆寺の創建と再建

前園 実知雄 (奈良芸術短期大学)

1 法隆寺以前の斑鳩

2 法隆寺の創建

- 1) 文献から見た場合
- 2) 考古史料から見た場合
- 3) 若草伽藍と斑鳩宮

3 再建非再建論争

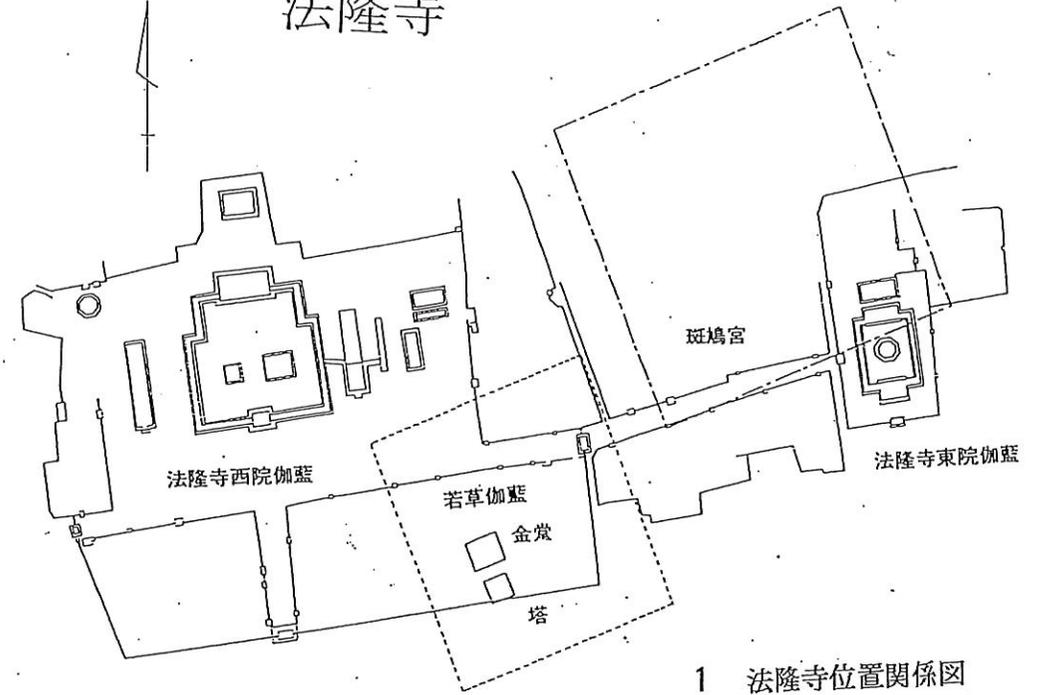
4 西院伽藍の建立

- 1) 吉備池廃寺 (百濟大寺) の建立
- 2) 法隆寺式伽藍配置と法隆寺式瓦
- 3) 法隆寺伽藍縁起並びに流記資財帳について

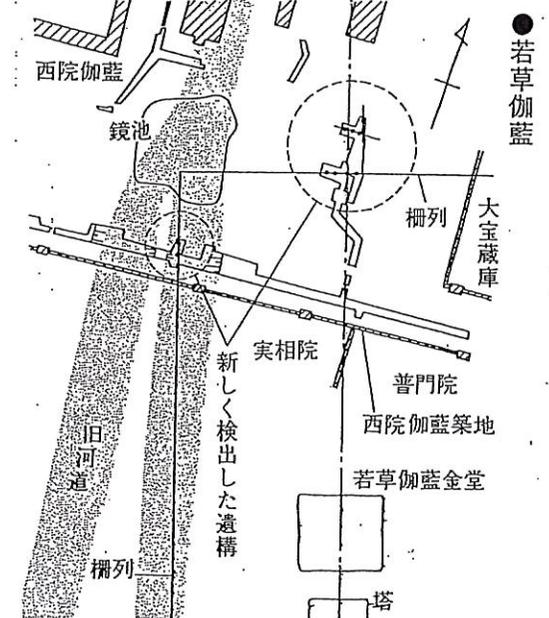
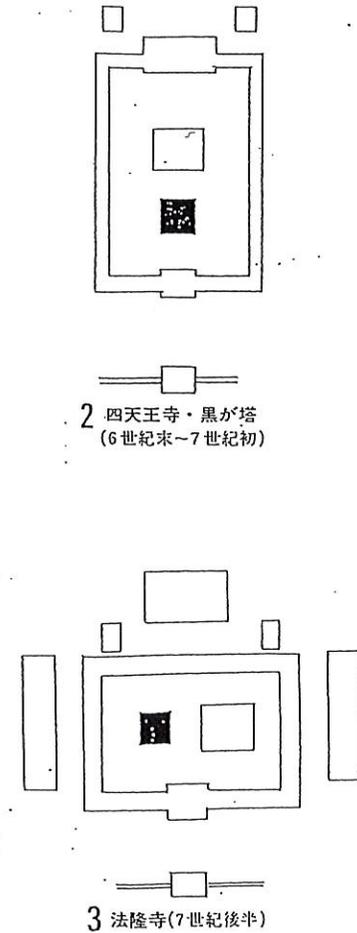


- 1 法輪寺 2 法起寺 3 中宮寺 4 法隆寺西院
- 5 法隆寺東院 6 若草伽藍 7 斑鳩宮 8 上宮遺跡

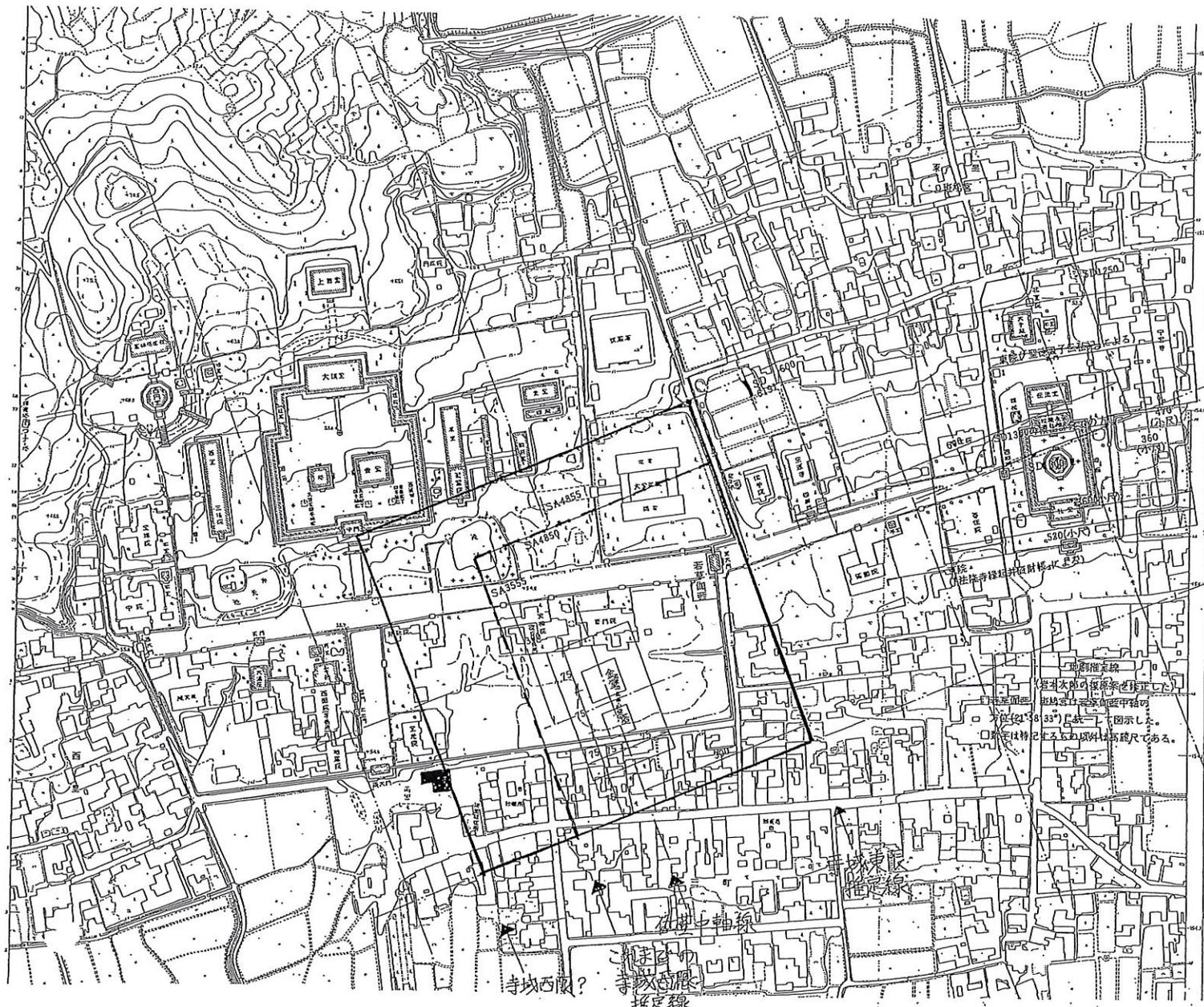
法隆寺



1 法隆寺位置関係図



4 「法隆寺防災施設工事発掘調査報告書」より



若草伽藍の寺域想定図

実線が今回の調査結果による想定範囲

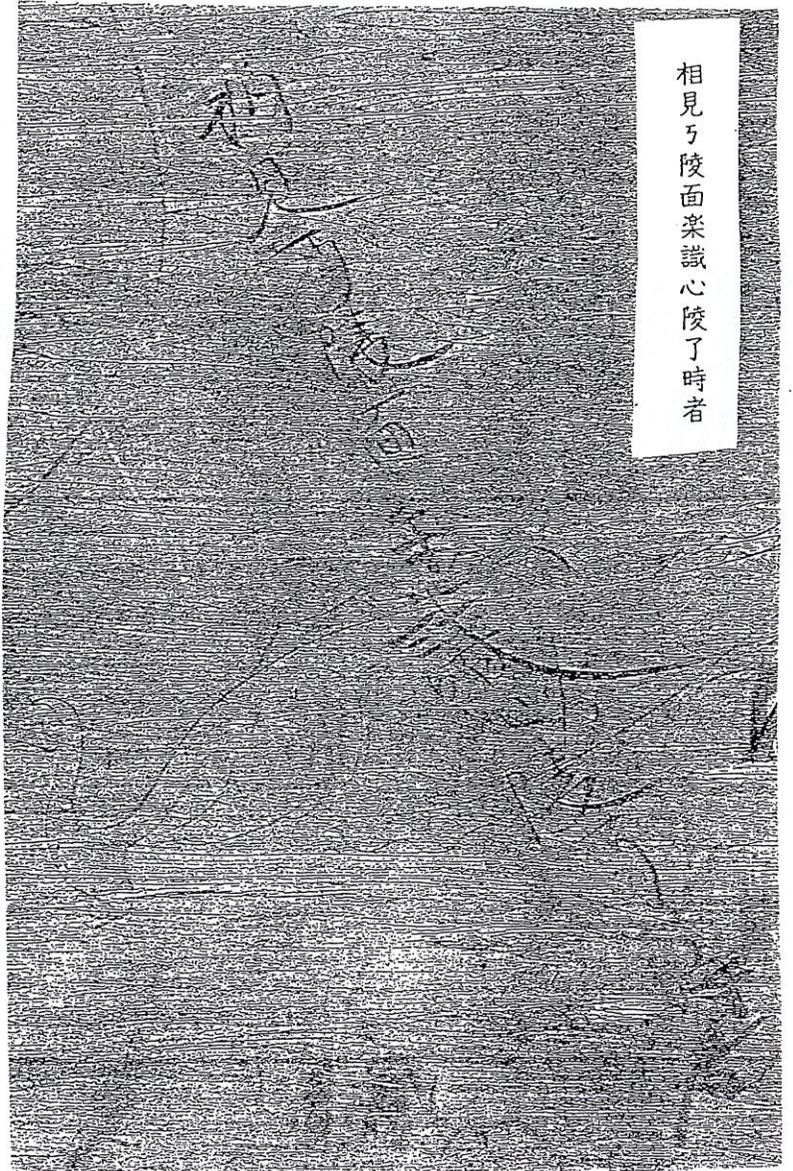
点線が従来の想定範囲

西暦	和暦	干支	法隆寺	法輪寺	法起寺	中宮寺	造営関係
574	敏達3	甲午	聖徳太子生る				
586	用明元	丙午	法隆寺・薬師仏の造立発願				586
588	崇峻元	戊申	飛鳥寺起工 百済国僧・工人進す				588
593	推古元	癸丑	聖徳太子、皇太子となる 四天王寺起工				593
601	推古9	辛酉	太子斑鳩宮を造る				斑鳩寺
605	13	乙丑	太子斑鳩宮に居ます				中宮寺
606	14	丙寅	太子法華経を岡本宮に講ず 播磨の水田を斑鳩寺に施入			岡本宮	588
607	15	丁卯	法隆寺完成する(1)		法起寺造る	中宮寺造る	609
610	18	庚午	4月30日夜半、斑鳩寺炎す(4)				高井田寺
622	30	壬午	聖徳太子薨す	法隆寺焼亡後			広隆寺
623	31	甲申	釈迦三尊像造る(2)	法輪寺造る(6)			610
638	舒明10	戊戌			金堂造る(7)		641
643	皇極2	癸卯	11月11日亥蘇我入鹿、山背大兄王等を斑鳩宮にて襲う。斑鳩宮焼失(5)				法輪寺
648	大化4	戊申	食封三百戸を法隆寺に施入(8)				山田寺
670	天智9	庚午	(4月30日夜半 法隆寺炎す一屋無余)(3)				662
679	天武7	己卯	食封停止				川原寺
685	13	乙酉			堂塔整う		676
706	慶雲3	丙午			露盤作る		680
708	和銅元	戊申	法隆寺建つ				薬師寺
739	天平11	己卯	行信律師、上宮王院夢殿を造立				698

岡本 東三

「法隆寺天智9年焼亡をめぐって——瓦から見た西院伽藍創建年代——」より引用

相見ろ陵面菜識心陵了時者



釈迦三尊像の台座裏に書かれた文字

推古九年（六〇一）

『日本書紀』

九年の春二月に、皇太子、初めて宮室を斑鳩に興てたまふ。

推古十三年（六〇五）

冬十月に、皇太子、斑鳩宮に居す。

推古一四年（六〇六）

秋七月に、天皇、皇太子を請せて、勝鬘經を講かしたまふ。三日に説き竟へつ。
是歳、皇太子、亦法華經を岡本宮に講く。天皇、大きに喜びて、播磨國の水田百町を皇太子に施りたまふ。因りて斑鳩寺に納れたまふ。

皇極二年（六四三）

十一月の丙子の朔に、蘇我臣入鹿、小徳巨勢徳太臣・大仁土師婆婆連を遣りて、山背大兄王等を斑鳩に掩はしむ。或本に云はく、巨勢徳太臣・倭馬飼首を以て將軍とすといふ。

是に、山背

大兄王等、山より還りて、斑鳩寺に入ります。軍將等、即ち兵を以て寺を圍む。是に、山背大兄王、三輪文屋君をして軍將等に謂らはしめて曰はく、「吾、兵を起して入鹿を伐たば、其の勝たむこと定し。然るに一つの身の故に由りて、百姓を残り害はむことを欲りせじ。是を以て、吾が一つの身をば、入鹿に賜ふ」とのたまひ、終に子弟・妃妾と一時に自ら經きて俱に死せましぬ。時に、五つの色の幡蓋、種種の

天智八年（六六九）

十二月に、大藏に災けり。

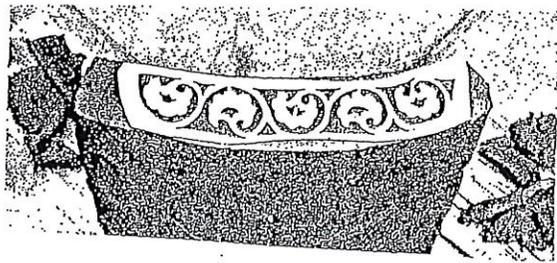
是の冬に、高安城を修りて、畿内の田税を收む。時に、斑鳩寺に災けり。

天智九年（六七〇）

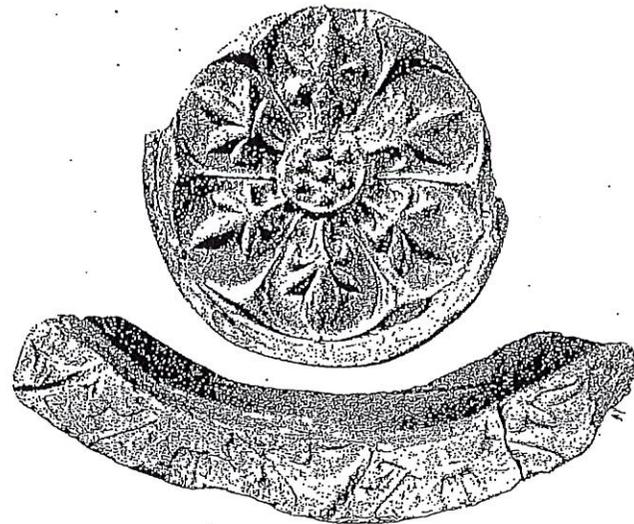
夏四月の癸卯の朔壬申に、夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も餘ること無し。大雨ふり雷震る。

『上宮聖徳太子伝補闕記』

庚午年四月卅日夜半。有災斑鳩寺。（中略）斑鳩寺被災之後。衆人不得定寺地。故百濟入師率衆人令造葛野蜂岡寺。令造川内高井寺。百濟聞師。圓明師。下水君雜物等三人合造三井寺。



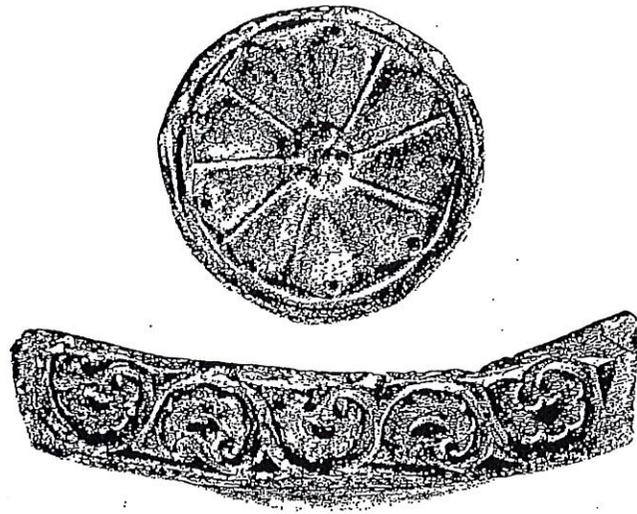
手彫り軒平瓦の型



若草伽藍の瓦 (3)



西院伽藍の瓦



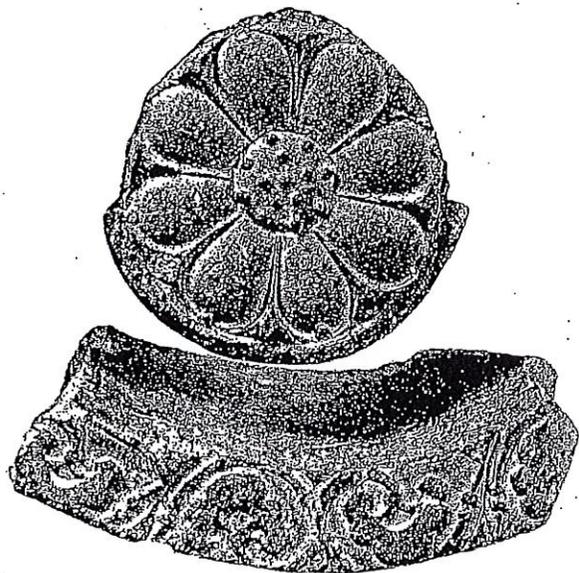
若草伽藍の瓦 (1)



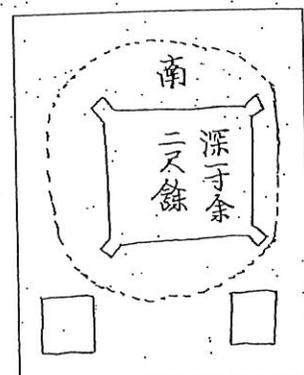
斑鳩宮の瓦



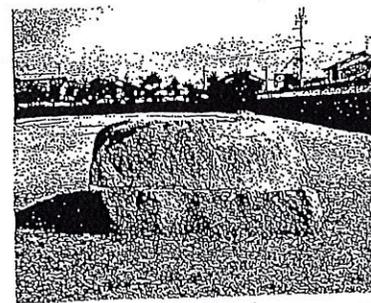
東院伽藍の瓦



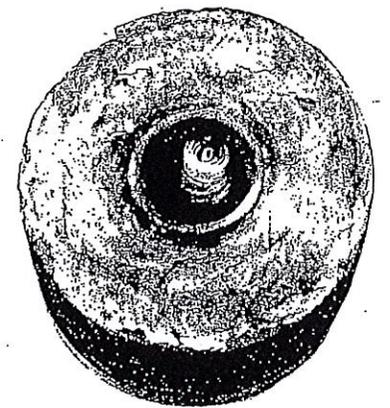
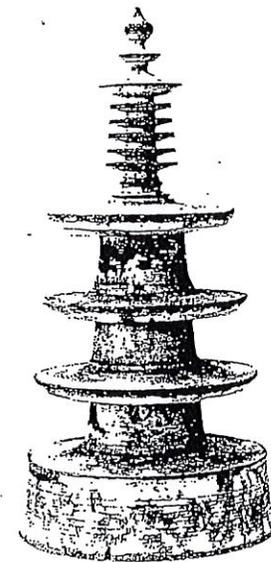
若草伽藍の瓦 (2)



「古今一掃集」に記された塔心礎



西面

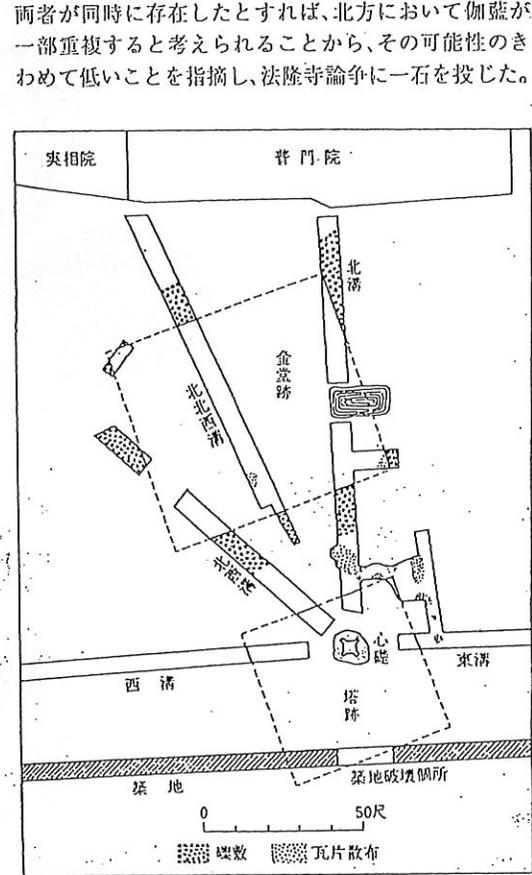


若草伽藍の発掘調査－伽藍中枢部(昭和14年)－

若草伽藍の発掘調査は昭和14年10月下旬、塔心礎の到着に先立ち、もとの位置を確定すべく、末永雅雄氏の指導のもと、普門院裏の外堀から二十七尺北よりの箇所を中心として十字形に幅三尺、長さ三十尺、深さ四尺余の規模で実施されたのが最初である。この調査では、十字交叉点の北側、深さ三尺の地点で風化した松香石の石塊に混じって、瓦の破片など心礎の下に敷き詰めたとされる砂利層が検出されている。

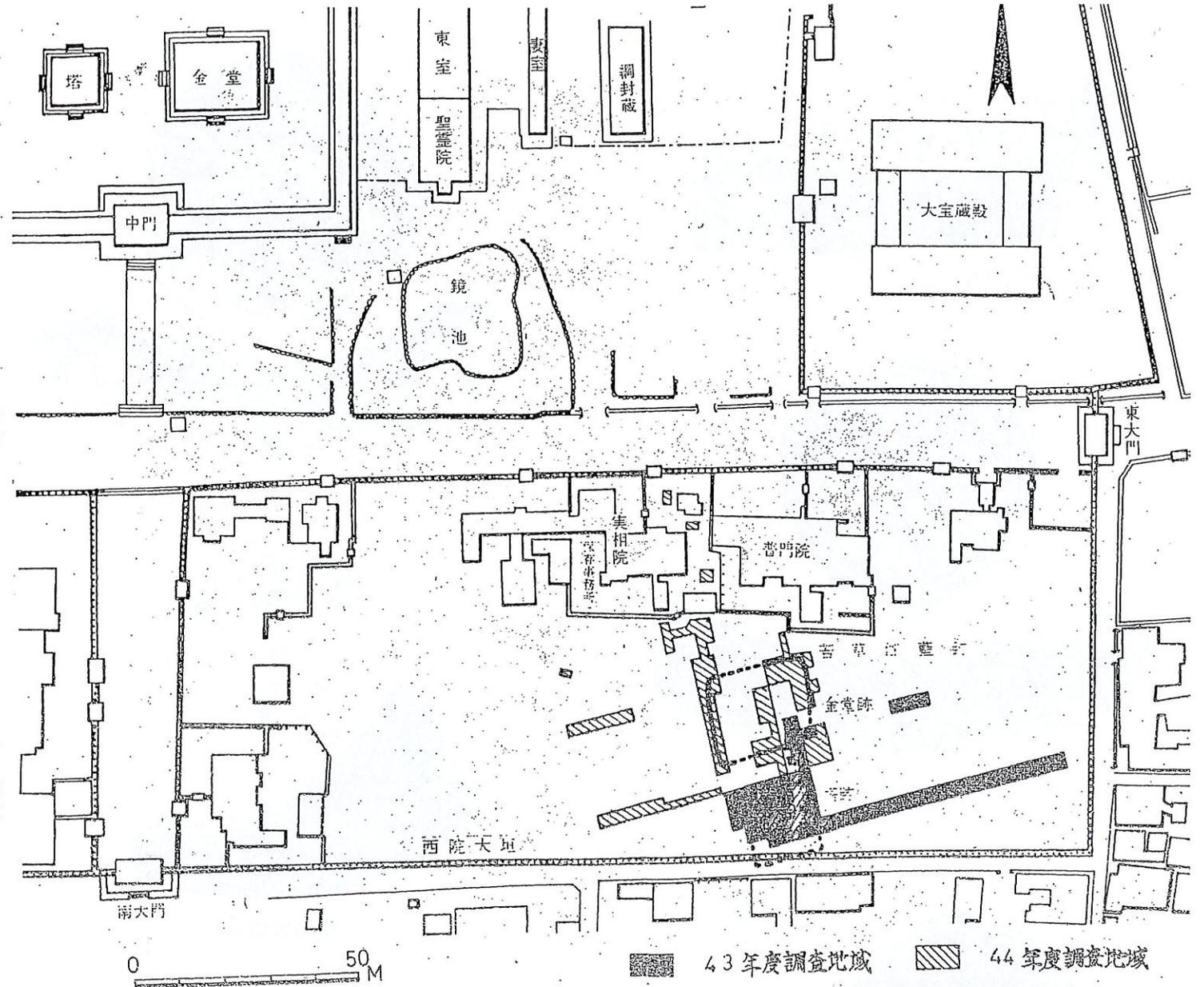
10月22日に塔心礎は調査の結果にもとづいて旧所在地に安置され、その後、本格的な発掘調査が同年12月7日から石田茂作・末永雅雄の両氏によっておこなわれている。調査区は最初、塔心礎を中心に調査区が設定され、基壇の土層とその周囲に埋没する瓦の推積が確認されている。発見された基壇は一辺五十一尺(15.5m)で、塔跡基壇と推定された。その後、調査はその北側に及び、間口七十二尺(21.8m)・奥行六十四尺(19.4m)の金堂跡と推定される基壇が発見され、その周囲には十二尺の幅で小石敷が敷かれていることも確認された。この調査は塔跡と金堂跡基壇の検出後、12月22日に終了している。

石田氏は調査の結果から、若草伽藍が法隆寺西院伽藍の方位を示さず、北で20度西に振る方位をもち、仮に



若草伽藍遺構図

両者が同時に存在したとすれば、北方において伽藍が一部重複すると考えられることから、その可能性のきわめて低いことを指摘し、法隆寺論争に一石を投じた。



若草伽藍の発掘調査－伽藍中枢部(昭和43・44年)－

若草伽藍跡の発掘調査は昭和43、44年にもおこなわれている。昭和43年の調査は金堂跡と塔跡の再調査と回廊跡の確認を目的として実施されている。この調査で最も大きな成果は、塔基壇の築成が金堂基壇築成後の整地土を掘り下げておこなわれていたことが判明した点で、これによって、金堂基壇の造営が塔基壇の造営に先行することが明らかになった。塔跡の調査では、基壇の東西幅が15.85mであること、基壇中央部分に塔心礎を据え付ける掘りこみが存在しないこと等が明らかにされている。なお、東回廊推定線の調査もおこなわれたが、削平のため、明確な遺構は確認されていない。

昭和44年には金堂跡の再調査と、講堂、西回廊の確認を目的とした調査が実施されている。金堂基壇はこの調査によって東西約22m、南北約19.5mの規模をもつ、東西棟の建物であることが判明している。また、前年に検出されていた塔基壇下層の溝が金堂基壇の西辺をのぞく三辺に沿って検出され、金堂の周囲にめぐらせた排水用の溝であることも明らかになっている。さらに、昭和14年の調査で金堂基壇周囲の礎敷と判断されていた遺構が、礎敷面から中世土器が出土することや、その基土に平安時代以降の土器が含まれることから、創建時のものではないことも確認されている。なお、講堂、西回廊は後世の擾乱や削平が著しく、明確な遺構は検出されずに終わっている。



若草伽藍塔跡の発掘調査(昭和43年)

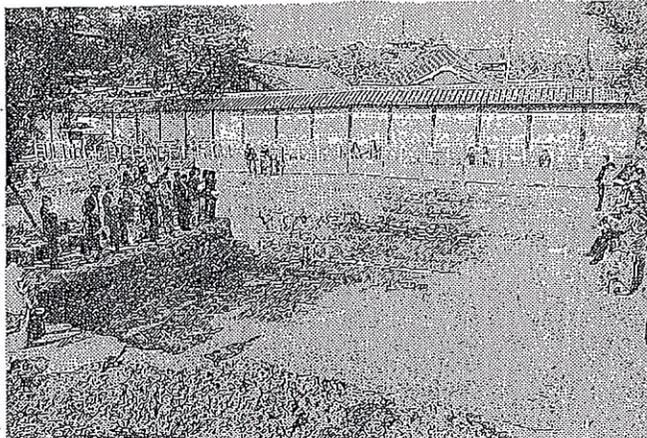
よみがえる「幻の伽藍」

最古の寺院壁画 法隆寺から出土

地中の眠りから目覚めた約1400年前の「最古の壁画」。色づいた小さな破片と焼けた瓦は、聖徳太子が建立し、火に消えた伽藍の歴史を、くっきりと描き始めた。

創建時の姿 ほうふり

日本書紀には604とする。上原和・成城大年、朝廷が朝鮮半島から名蓋教授美術史は「若渡来した画工集団を出自 草伽藍から、高句麗にみなどによって組織化したられる軒平瓦が見つ



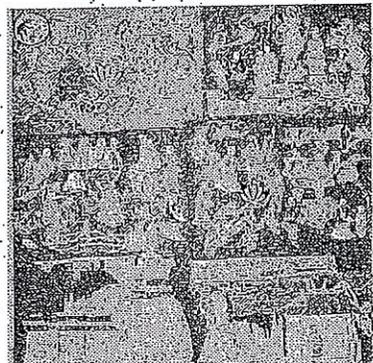
最古の寺院壁画とみられる破片が出土した発掘現場。奈良県斑鳩町で1日、山田耕司写真

法隆寺	関連年表
建立	607
聖徳太子没	622
蘇我入鹿没	643
聖徳太子没	670
蘇我入鹿没	711
聖徳太子没	739
蘇我入鹿没	1905
聖徳太子没	1939
蘇我入鹿没	1949
聖徳太子没	1993

その後、建立者・聖徳太子の一族の滅亡、そして白村江の戦い（663年）、百濟、高句麗の滅亡など激動が続く中、法隆寺は炎に包まれたとされてきたが、文献以外に確かな証拠がなかった。和泉・京都教育大教授（古代史）は出土した瓦の焼け具合などから

「聖徳太子生存中に塔も金堂も完成したはず。塔雷で塔が燃え、金堂も類焼したが、全焼には至らなかつた。西院の金堂に飛鳥時代の仏像が残っていることなどで説明できるとみる。

「聖徳太子生存中に塔も金堂も完成したはず。塔雷で塔が燃え、金堂も類焼したが、全焼には至らなかつた。西院の金堂に飛鳥時代の仏像が残っていることなどで説明できるとみる。



中宮寺の国宝「天寿国綱帳」。聖徳太子の死後、きさきの橘大郎女が絵師の元図を基に、侍女たちにつくらせた

細かい絵柄で刺繍と類似か

壁面全体に絵を描いていたとしても、一つの絵柄が細いというのが研究者の一致した見解だ。図柄的にも、同時代のものとしても参考になるのが近くの中宮寺に残る刺繍「天寿国綱帳」(国宝)。見つけた破片には、花ひらのようなものの重なり具合など、

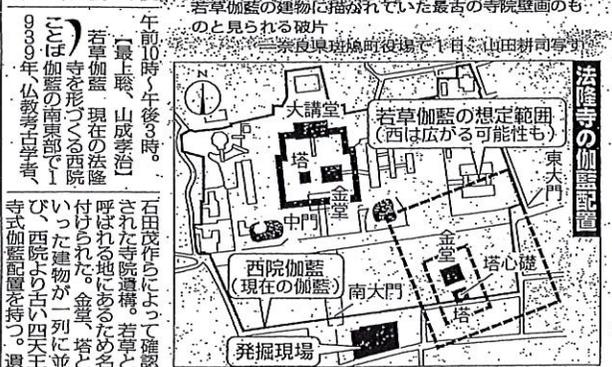
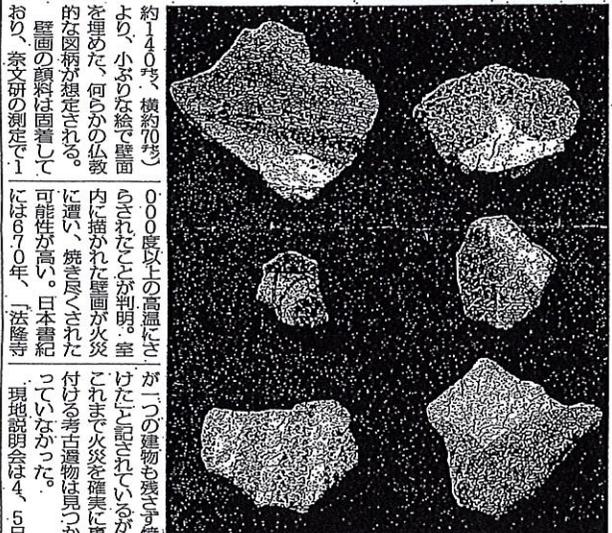
刺繍との類似を連想させる線がみられる。刺繍の原因は、壁画を描いたとみられる画工集団がつくったことと分かっていく。法隆寺に關連する品には、同刺繍や玉虫厨子など細かい絵柄で仏教説話を表したものが残っており、壁画もそれに類するものではないが。壁面には一般に分かりやすく仏教を広めようとした、建立者・聖徳太子の意図が強く反映されているのではないだろうか。

法隆寺に最古の寺院壁画

破片多数

7世紀初頭 炎上説も裏付け

世界最古の木造建築、法隆寺(奈良県斑鳩町)の南大門近くから、彩色がある壁画の破片が多数出土した。1日発表された可成り大きな破片は、描き線が鮮やかで、なごごとした聖徳太子が建立した斑鳩寺と推定された創建時の法隆寺とみられる。日本最古の寺院壁画とみられる。これまで最古例だった現法隆寺金堂壁画(7世紀末)の破片は、半世紀以上さかのぼる画期的な発見。破片は、日本書紀にある「法隆寺炎上」を考古学的資料でほぼ確定させた。画題は不明だが、確認された白地の下塗りや描き線は、同寺の現金堂や同県明日香村の高松塚キートン土偶(7世紀末〜8世紀初め)などにみられる技法だ。(27面に関連記事)



跡には現在、塔の心礎を支えた礎石(心礎)を安置する。想定される範囲は東西150m、南北180m。現在の建物との方位の違い(真北から約20度西にずれる)などから、7世紀初頭の創建当初の遺構とみられる。

法隆寺東院の掘り出し建物

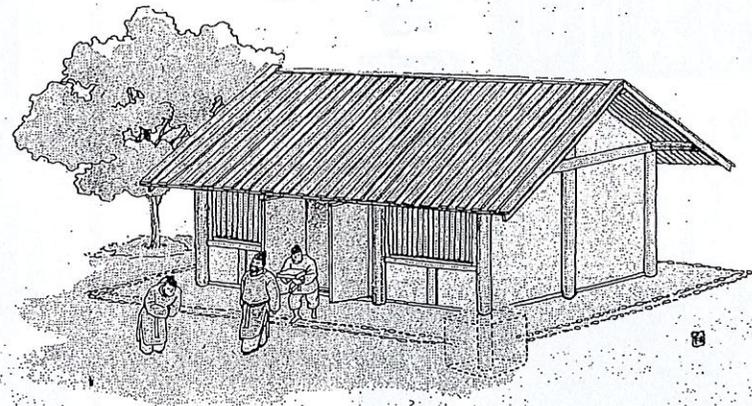
掘立て柱の建物は、縄文時代以来の日本の伝統的な建築技術である。今日ではあちこちに復元住居も建てられているが、建物が焼けたり老朽化して廃絶すると、柱穴もいつしか普通の土のようになってしまうのがむづかしい。

古代通信

発掘を読む

い。そのような掘立て柱をつぎとめるうえの研究の歴史で、法隆寺東院（奈良県斑鳩町）の調査は有名である。法隆寺境内の発掘に携わったことのある前園美知雄・奈良県立橿原考古学研究所資料室長の説明を聞く。

（同志社大教授 森浩一）



奈良時代の掘立て柱建物。地中に柱が埋まっていた（点線部分）
イラスト・早川 和子

雨落ち溝に注目

発掘現場の説明会を見学に行くと、何の変哲もない地面に、きれいに掘りあがった四角や円形の穴が並

び、そこにかつてあった建物の跡がみごとに再現されているのがわかる。

全国でも日常的に行われているこの発掘法は、今から約半世紀前、法隆寺東院の調査で開発された。夢殿で有名な法隆寺東院は、上宮土院とも呼ばれ、昭和九年（一九三四年）

「東院縁起」によれば、天造したことを意味している。柱の腐朽した部分が、空洞として残ったのは、そこが風雨にさらされたことが原因だと示している。このように、最も恵まれた条件の中で、最初の掘り出し建物は発見された。

地下空洞から斑鳩宮発見

しかし、浅野博士の追求はここで終わらなかつた。東院が斑鳩宮の跡地に建てられているという伝承が正しいければ、この建物とは無関係の掘立て柱建物が存在したはずである。こう考え

た博士は、奈良時代以来、最も残り具合のいい伝法堂の地下に目を向け、斑鳩宮を追った。そして、ついに、地面にあけた穴（掘り出し建物とは無関係の、四方の掘立て柱を建てる穴を掘り当てたのである。最初の空洞発見から実に五年の歳月が流れていた。

斑鳩宮の発見は、このように博士のちみちな観察眼と、問題意識、忍耐によって成し遂げられたが、この発掘技術（柱を立てるため、真上で礎石をもつ建物に改

も土に変化があり、丁寧に応用し、木棺を直接土の中に入れて埋葬した古墳の発掘法を編み出した。

昭和三十八年から五年間、わたった橿原市の新沢千塚古墳群の調査で、藤原氏の技術は木棺直葬墳の発掘方法を確立していた。今では割竹形木棺とか組合式箱形木棺といった、跡形も残っていない木棺の形式分類を行えるまで技術は進んでいるが、その研究史について振り返ることも必要だ

平成6年5月14日

木造建物の修復された建物

法隆寺は古い木造建築がたくさん現存する大伽藍（がらん）である。七八世紀のアジア諸地域を例にとると、法隆寺のような木造建築は各地にあった。ところがそのほとんどが現代まで伝わっていない。もちろん度重なる戦乱で失われたのは事実だが、それだけだろうか。法隆寺の建物をじっくり観察している

掘立て柱建物が縄文時代以来の伝統をひく建物である。その上に瓦を葺（ふ）いた瓦（かわら）とともに六世紀末に朝鮮半島を経て伝わった。固めた土壇の上に、柱を木組みと瓦の重量でバラ

スを保っているわけだ。掘立て柱建物は、柱が直接土中に埋まっているため、たいへん腐りやすい。現在、伊勢神宮では二十年に一回回宮がおこなわれる。この間隔は、掘立て柱の建物である建築物の寿命と関係があるのかもしれない。という意見もあるくらいだ。

光寺東大蔵は大中十一年（八五七年）に建てられた。日本の年号でいえば、それぞ奈良時代後期と平安時代前期ということになる。広い中国で、唐代以前の木造建築はこの二つだけである。

日本ではどうだろうか。薬師寺東塔、正倉院、唐招提寺講堂・金堂、栄山寺八角堂など、奈良時代の木造建築物は数多く残っているが、なんともいって法隆寺の建物群の保存のよさは驚嘆に値する。法隆寺は昨年、「最古の木造建築」として世界の文化遺産の一つに選ばれたが、他の文化遺産とは一味違う異彩を放っている。ひょっとして

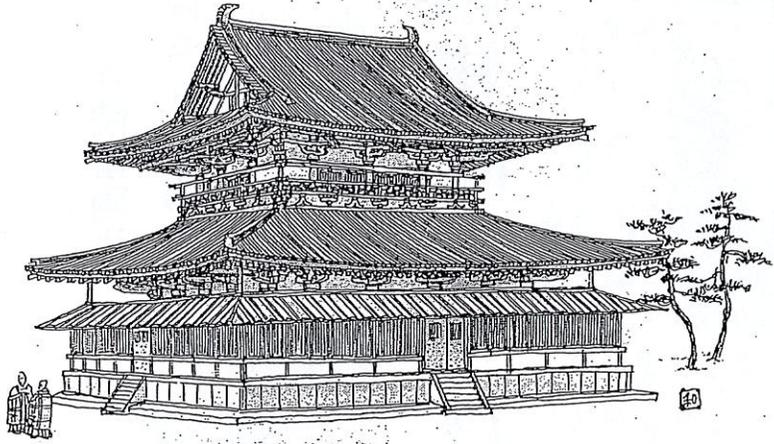
百万塔についてである。奈良時代、孝謙天皇が藤原仲麻呂の乱を契機に鎮護国家思想を高めるため、京都の十大寺に各十万基ずつ、陀羅尼（だらか）経を納めた木造の小塔（百万塔）を分け置いたが、いま法隆寺以外で本来の百万塔を残す寺院はない。法隆寺にはなんと約四万六千基が保存されている。この一例が、世界最古の木造建築が今に伝えられた事情を雄弁に物語っている。

古代通信

発掘を読む

と、柱一つにもきめ細かな修理の跡が目につく。洋服にたとえれば裏がめつと補強しているようなものだ。法隆寺の古建築を今日まで伝えてきた気配りについて、前園美知雄・奈良県立橿原考古学研究所資料室長に教えてもらった。

（同志社大教授 森浩一）



法隆寺・金堂。1300年前の姿を今に伝える イラスト・早川和子

世界最古の木造建築 1300年の補修管理で

いっぽう礎石建物は、補修管理さえしっかりしておけば、比較にならないほど長持ちする。法隆寺宮大工として有名な西岡常一氏の言葉を借りれば、建物は木の寿命と同じく、夫（つま）といつて、なる。仮に樹齢千年の材を使えば千年はもつていっただけだ。

しかし、現実には千年を超える木造建築が、どこにも数多く残っているわけではない。日本寺院建築のルーツである中国ではどうだろうか。最古の木造建築といわれるのは、山西省の靈山五台山近くの南禅寺、仏光寺にある。その南禅寺大殿は唐の建中三年（七八二年）、仏

な立場などの条件がそろ

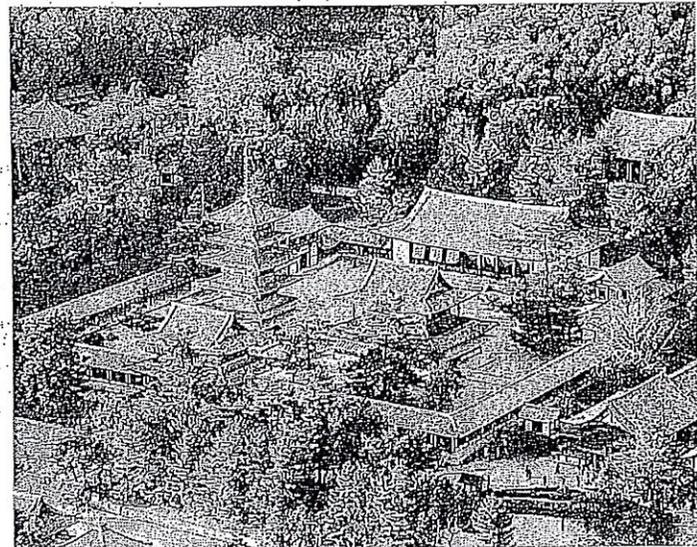
平成6年5月28日

古代通信

発掘を読む

法隆寺の建物を見ていると、古い柱の傷んだ部分に埋め木をしているところがたくさんあって、修理に修理を重ねた跡がある。このような配りも法隆寺の建築を今日まで伝えたノウハウである。その法隆寺の歴史について、前園実知雄・奈良県立橿原考古学研究所資料室長の意見を聞く。

(同志社大教授 森浩一)

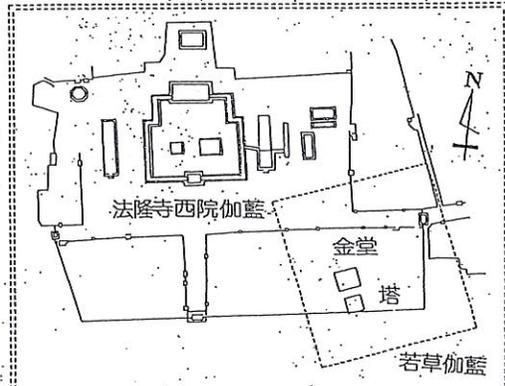


世界最古の木造建築、法隆寺。中央は西院伽藍—本社へりから

法隆寺再建・非再建論争

法隆寺は世界文化遺産に登録され、名実ともにかけがえない世界の宝物になった。この法隆寺の建物群がいつごろ建てられたか、また、はたして建て替えたのか、という点については、専門家なるとも関心を持つ人は多い。法隆寺の創建に関する資料は、『日本書紀』の「日本書紀」に、①金堂の薬師如来像の後背に、②金堂の釈迦三尊像の銘文、③法隆寺伽藍縁起並流記資財帳が主なものである。また、『辛巳年八月九日作』と年月日が記されている。『辛巳年』は六三二年にあたり、後背に刻まれた「推古三十一(六三二)年に像が造られた」という銘文に矛盾しないことが明らかになった。少なくともそれ以前に法隆寺が存在していたことは間違いない。

ところで、『日本書紀』には法隆寺に関する記事は極めて少ないが、庚午(六三〇)年四月二十日の条に「夜半に法隆寺に火災がおり、寺院を焼滅した」とある。さらに一九六八、六九年には文化庁による調査が行われ、若草伽藍を創建法隆寺とすることが、この論争の決着点の一つとなった。また、一九八二年の境内の調査で、若草伽藍の北と西の端とみられる欄干と、南に流れる自然と人工の二つの水路を検出した。自然水路は若草伽藍の柵を設けたため、西側にパイプを埋め、西側にパイプ博士等の若草伽藍の発掘調査であった。現在の西院伽藍の東側にある「若草」の地名を残すところで、金が明らかになった。このこ



法隆寺の西院伽藍と若草伽藍の位置図

焼失説が有力だが いまだ決着つかず

「尋(ひろ)」「丈(じゆ)」「宝令(七〇一年)が初めの再建・非再建問題にも深くかかわっているからである。つまり法隆寺の建物群が高麗尺によって設計されたか、それによって設計されたか、という点に注目したい。この制度は唐制に習ったもので、正倉院室物の中に残る撥練(はち)の尺など、遺品もいくつかはみられる。また、現在の学会の多くは、高麗尺は存在していたであろうとの見方が有力であるが、それに疑問をはさむ意見もある。法隆寺を高麗尺で設計するよりも、朝鮮半島の遺跡や日本の寺院の分析を通して得られた、約〇・二六八が一尺の単位とする「古韓(こかん)尺」の存在を指摘する新井宏氏の見解などがそれである。

「高麗尺」の祖形と考えられている「東魏尺」が、最近の中国の研究によって存在しないことが明らかになった。現在の、最も必要となるのは、次のことである。「高麗尺」があったのは、つまり、中国の古代の物差しが唐大尺で約〇・二九七、令の大尺が唐大尺の二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。

次から若草伽藍と西院伽藍は、明らかに前後関係があることが立証され、再建・非再建論争に最終的な決着がつけられたかに見えた。しかし、一方、若草伽藍に回廊や講堂の遺構がみられないことなどから、若草伽藍は完成をみずから計画変更し、西院伽藍において再建されたという「非焼失論」や、西院伽藍の完成時期は別にして、建築様式や瓦の変遷から見て、金堂は一足早く斉明朝(六五五—六六一年)に造営を開始したのではないかと見解も出され、この論争はさらに混沌としてきたというのが現状である。

たとえ再建されているにしても、世界最古の木造建築であることには変わりはないが、この論争の根柢には、七世紀後半の木造建築の解釈、法隆寺に残る数多くの工芸品の位置づけ、再建にあたっての協力者の問題など、飛鳥時代から奈良時代にかけての日本の政治、文化を考えるうえにおいて、避けて通るべき重要な要素が多く含まれているのである。

(前園実知雄)

次回掲載は十月十九日(木)です。

古代通信

発掘を読む

昭和三十年代、僕は折尺(おれじやく)を持って古墳を訪ね、入り口のあいている横式石室の図面作りに熱心した。折尺は折尺量式の木の物差しで、メートルと寸両方の刻みがつく。ふつうはメートル盛りを使うが、古墳時代も最後のころになると、尺目盛りでセンチメートルと数字で測れるものがある。

六、七世紀の石室で、三十五センチメートルに設計されたと思われるものはいくつもあり、法隆寺の再建・非再建論争で登場した高麗尺(こまじやく)ではないかと考えられるようになった。さらに最近、青森市の三内丸山遺跡の大型建物が三十五センチ単位で設計されていることがわかった。富山市の藤田富士夫氏の研究でも、縄文時代、日本海東部の遺物で同単位の使用例が明らかになった。物差しの使用はうんと古いことになる。

今回は、法隆寺創建の古高麗尺について、前園実知雄・奈良県立橿原考古学研究所資料室長に説明してもらおう。

(同志社大教授 森浩一)

飛鳥時代の建築現場。すでに定規で材木の寸法が測られていた。

イラスト 早川和子



「尋(ひろ)」「丈(じゆ)」「宝令(七〇一年)が初めの再建・非再建問題にも深くかかわっているからである。つまり法隆寺の建物群が高麗尺によって設計されたか、それによって設計されたか、という点に注目したい。この制度は唐制に習ったもので、正倉院室物の中に残る撥練(はち)の尺など、遺品もいくつかはみられる。また、現在の学会の多くは、高麗尺は存在していたであろうとの見方が有力であるが、それに疑問をはさむ意見もある。法隆寺を高麗尺で設計するよりも、朝鮮半島の遺跡や日本の寺院の分析を通して得られた、約〇・二六八が一尺の単位とする「古韓(こかん)尺」の存在を指摘する新井宏氏の見解などがそれである。

「高麗尺」の祖形と考えられている「東魏尺」が、最近の中国の研究によって存在しないことが明らかになった。現在の、最も必要となるのは、次のことである。「高麗尺」があったのは、つまり、中国の古代の物差しが唐大尺で約〇・二九七、令の大尺が唐大尺の二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。

法隆寺再建・非再建

めぐり高麗尺に注目

「尋(ひろ)」「丈(じゆ)」「宝令(七〇一年)が初めの再建・非再建問題にも深くかかわっているからである。つまり法隆寺の建物群が高麗尺によって設計されたか、それによって設計されたか、という点に注目したい。この制度は唐制に習ったもので、正倉院室物の中に残る撥練(はち)の尺など、遺品もいくつかはみられる。また、現在の学会の多くは、高麗尺は存在していたであろうとの見方が有力であるが、それに疑問をはさむ意見もある。法隆寺を高麗尺で設計するよりも、朝鮮半島の遺跡や日本の寺院の分析を通して得られた、約〇・二六八が一尺の単位とする「古韓(こかん)尺」の存在を指摘する新井宏氏の見解などがそれである。

「高麗尺」の祖形と考えられている「東魏尺」が、最近の中国の研究によって存在しないことが明らかになった。現在の、最も必要となるのは、次のことである。「高麗尺」があったのは、つまり、中国の古代の物差しが唐大尺で約〇・二九七、令の大尺が唐大尺の二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。

物差しのルール

「尋(ひろ)」「丈(じゆ)」「宝令(七〇一年)が初めの再建・非再建問題にも深くかかわっているからである。つまり法隆寺の建物群が高麗尺によって設計されたか、それによって設計されたか、という点に注目したい。この制度は唐制に習ったもので、正倉院室物の中に残る撥練(はち)の尺など、遺品もいくつかはみられる。また、現在の学会の多くは、高麗尺は存在していたであろうとの見方が有力であるが、それに疑問をはさむ意見もある。法隆寺を高麗尺で設計するよりも、朝鮮半島の遺跡や日本の寺院の分析を通して得られた、約〇・二六八が一尺の単位とする「古韓(こかん)尺」の存在を指摘する新井宏氏の見解などがそれである。

「高麗尺」の祖形と考えられている「東魏尺」が、最近の中国の研究によって存在しないことが明らかになった。現在の、最も必要となるのは、次のことである。「高麗尺」があったのは、つまり、中国の古代の物差しが唐大尺で約〇・二九七、令の大尺が唐大尺の二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。そして高麗尺が令大尺と同じで、二倍で約〇・三五六、姿勢であった。

火災前着工説に疑問

法隆寺の年輪年代調査

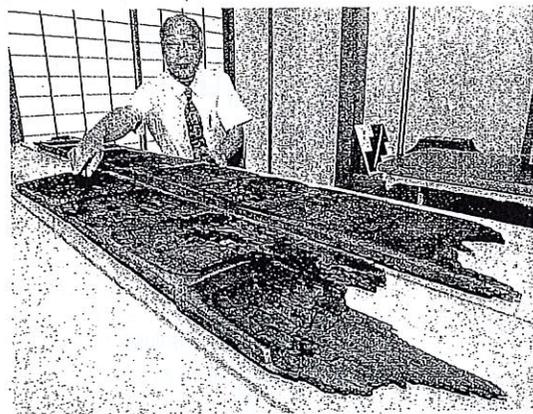
菅谷 文則



すがや・ふみのり 1942年奈良県生まれ。関西大学大学院修士課程修了。著書に「法隆寺の至宝・鏡」「日本人と鏡」など。

対象部材極めて少数 炭素測定との併用必要

法隆寺の金堂、塔、中門などの柱や天井板に対し、年輪年代調査が行われ、話題を集めている。聖徳太子在世中に建てられた法隆寺が、現在のものかどうかについて、明治三十年代から百年に及ぶ研究があり、法隆寺再建非再建論争といわれてきた。再建論は、日本書紀が天智九(六七〇)年に法隆寺が焼失したと記している。その後の再建とするものである。すく南東で寺跡の「若草伽藍」が



年輪年代測定された法隆寺金堂の天井板

安置するために若草伽藍問題があると考えられる。年輪年代調査は、金堂、塔、中門を合わせた数万点の建築部材があるが、調査された部材は百七点で、極めて少数にすぎない。しかも年代が公表された資料は一部で、語などから仏像の制作年代の研究も進んでいる。

年輪年代の測定結果を、から三年間、法隆寺の防工事に伴う発掘調査に携わり、若草伽藍の北西部分を明らかにして、非再建説が成立しないことを考古学的に証明した。その経験から、南辺と東部の調査の必要性を痛感している。その時はもう、併用つまり異なる科学的な方法による重複検証だ。最後に考古学への期待(考古学・滋賀県立大教授) 授

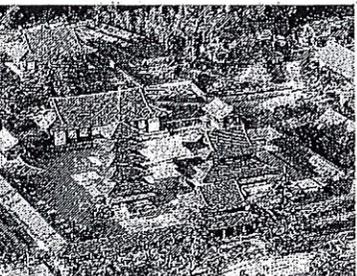
前園 実知雄

「斑鳩・法隆寺の五重塔の建立時期が、『年輪年代法』によって解明されよう」として「という記事が各紙で大きく報道された。奈良国立文化財研究所の発表によると、五重塔の心柱に用いられたヒノキは、五九四年に伐採されたようである。再建法隆寺の塔の立柱を、仮に天武初年(六七〇年代)としても、伐採年とは約八十年の差がある。

吉備池廃寺に着目 法隆寺については、『日本書紀』天智九年(六七〇年)四月三十日条の「夜半の後に法隆寺に災(ひつ)けり。一、屋も余ること無し。大雨あり雷震(なる)。」の記事をめぐり、再建・非再建論争が

法隆寺西院伽藍と百済大寺

再建をめぐる一考察



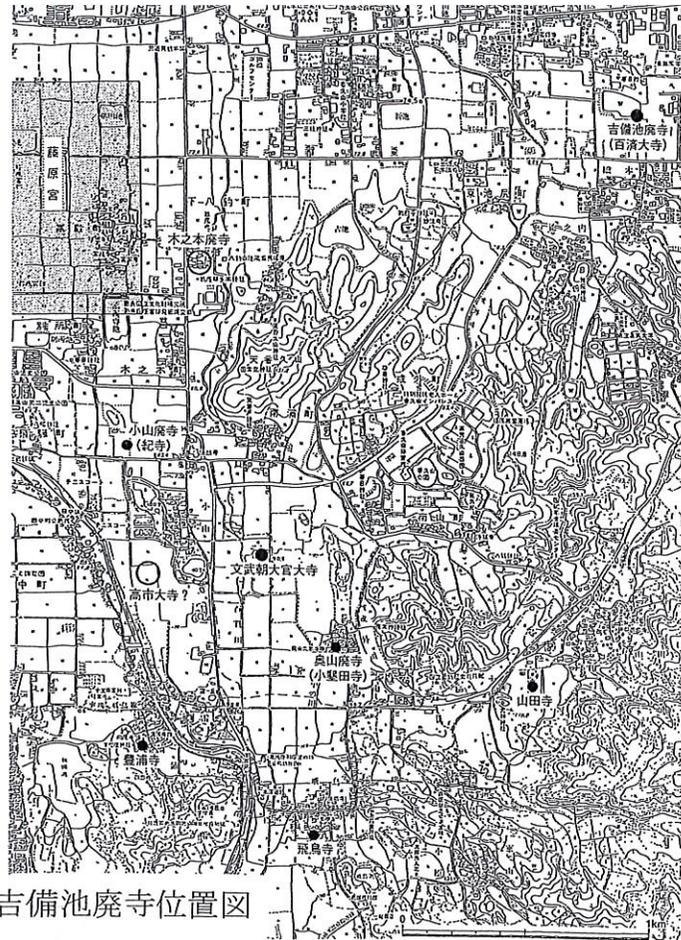
る人工の流路を確認している。私は法隆寺の再建問題について、従来とは違った切り口から迫ることはできないだろうかと考えている。それは、斑鳩から遠く離れた飛鳥にほど近い桜井市吉備で、平成九年から奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会によって進められている吉備池廃寺の発掘成果と大きく関わる。現在までに大規模な金堂と塔の基礎と、回廊、僧坊の一部が確認されてきた。吉備池廃寺出土瓦は、

年輪年代法による心柱の調査で、再建・非再建論争が再びクローズアップされた法隆寺(西院伽藍)

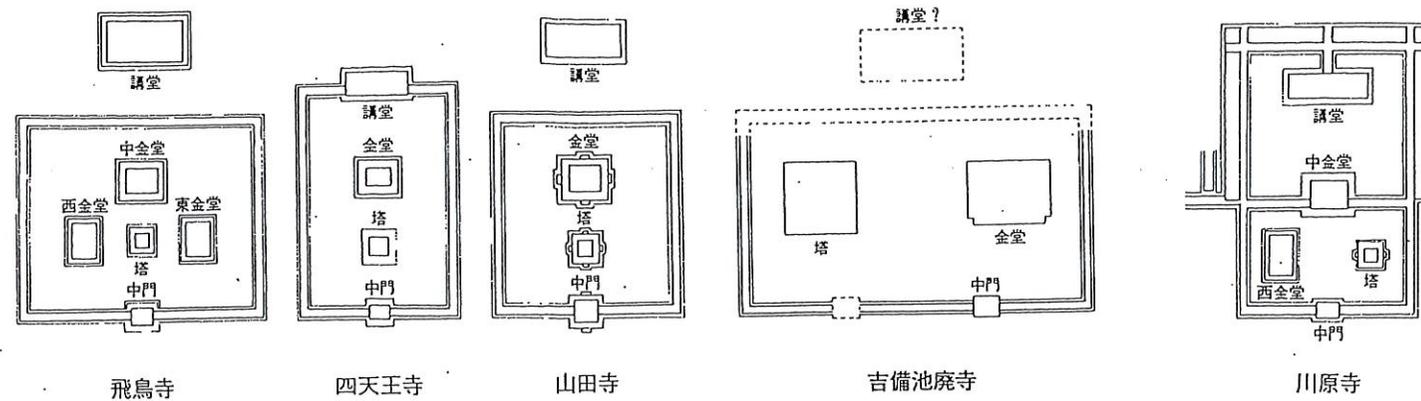
寺と仮定した上で、少し考えの調査で、推定地から中門をたみよう。中国においては、六八一年に隋から政権を奪った唐の高祖が、さっそく官立寺院を設け、仏教を国家的に支援する政策をとった。王来、この伽藍型式は、天智九年の交代劇を間近に見て、六二三年に帰国した遣唐使組は、早急に遣唐使派遣の必要性を説いた。舒明天皇が即位後間もない舒明天(六三〇年)に、第一回の遣唐使を派遣した背景には、西院伽藍に先行すただ上宮王家というパトロン

始まったのは明治二十年、廊、僧坊の一部が確認されてきた。吉備池廃寺出土瓦は、舒明十三年(六四一年)創建の山田寺の祖型と見てよい軒丸瓦と、若草伽藍の塔に使用された忍冬(にんどう)文軒平瓦の同范瓦がセットで、これを百済大寺と考えるのに年代の矛盾はない。舒明朝の仏教政策 法隆寺と百済大寺について私が注目している点は、その伽藍配置である。平成十一年

ある。吉備池廃寺出土瓦は、舒明十三年(六四一年)創建の山田寺の祖型と見てよい軒丸瓦と、若草伽藍の塔に使用された忍冬(にんどう)文軒平瓦の同范瓦がセットで、これを百済大寺と考えるのに年代の矛盾はない。舒明朝の仏教政策 法隆寺と百済大寺について私が注目している点は、その伽藍配置である。平成十一年



吉備池廃寺位置図



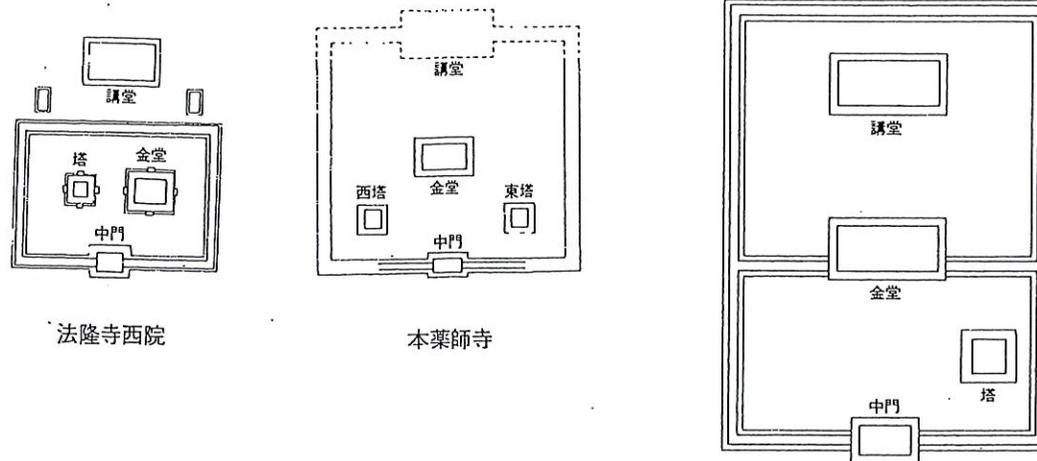
飛鳥寺

四天王寺

山田寺

吉備池廃寺

川原寺

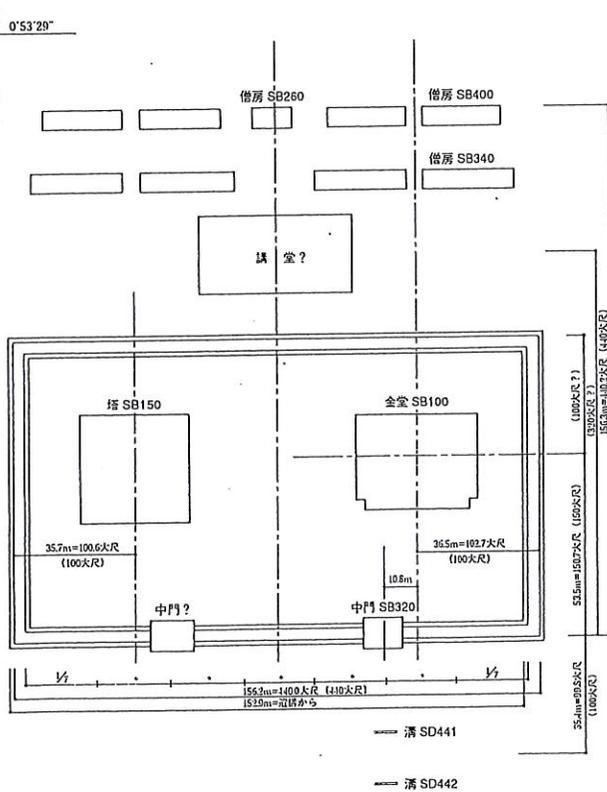


法隆寺西院

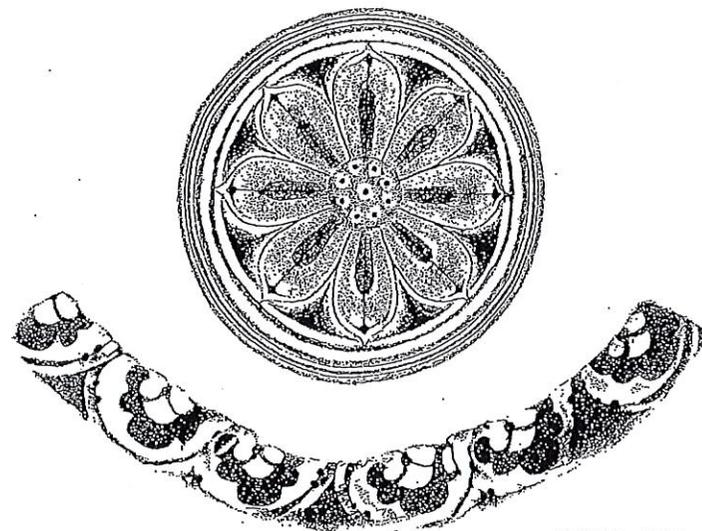
本薬師寺

文武朝大官大寺

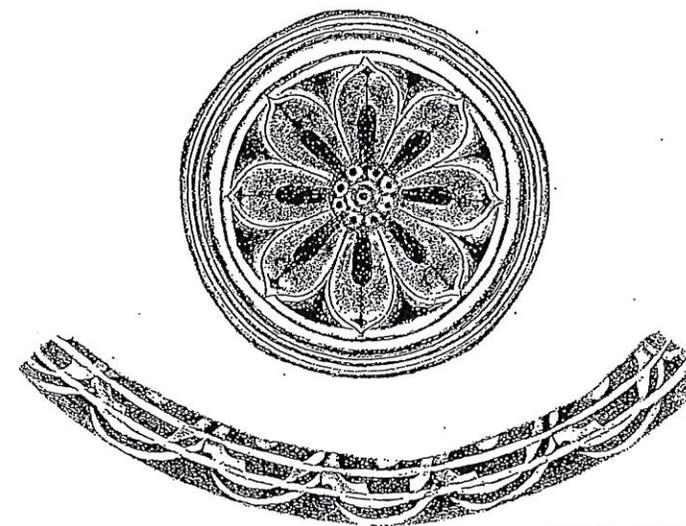
伽藍配置変遷図 (飛鳥時代),



吉備池廃寺の伽藍配置計画



軒丸瓦IA-軒平瓦IA



軒丸瓦IB-軒平瓦IB

吉備池廃寺の軒瓦

文化の扉

法隆寺 注目の謎

世界最古の木造建築物で、国内初のユネスコの世界文化遺産でもある法隆寺(奈良県斑鳩町)。この春、1949年の火災で焼損した仏教絵画の傑作、金堂壁画の総合調査が本格化する。歴史と文化財の宝庫は、注目の謎をいくつも抱える寺でもある。



井上章一教授
国際日本文化研究センター

時代を映す物語のロマン

中学生の時、「法隆寺の柱の膨らみは『エンタシス』と聞いて、起原はギリシャにある」と聞いて、壮大な歴史のロマンを感じました。でも大で建築史の勉強を始め、先輩にそのことを話すと「それは子供向けの作り話や」と一蹴されてしまいました。私も今では、この説には無

理があると思うようになりましたが、まだ多くの人が信じているようです。なぜそこまで広まり、人々に愛されたのかに興味を引かれます。膨らみのある柱は中国・北魏時代の雲崗石窟(5世紀)にも見られます。法隆寺は「東アジア文明のたまもの」とみるべきなのに、なぜかギリシャに結びついた。そこには西歐と自らを同一視しようとした、日本の近代化のあり

が、私も今では、この説には無

南大門をくぐると、正南門に見えてくるのが寺内。で最も古い建物が集まる「西院伽藍」だ。すべての建物が国宝。金堂にアーモンド形の目に微笑をたたえた釈迦如来を中心とした釈迦三尊像や、薬師如来像、四天王立像などの国宝仏が並ぶ。金堂では、解体修理中の49年1月に火災が発生。日本最古の仏教絵画である壁画(重要文化財)が大きく焼損し、伽藍の東の収蔵庫で保管されている。いま金堂の壁を飾るのは、67年から当時最高峰の日本画家らが描いた再現壁画だ。西院伽藍の東に百済観音像(国宝)や玉虫厨子(同)などの寺宝を公開する大宝蔵院があり、さらに東には東院伽藍がある。中心にあ

る夢殿は、聖徳太子の斑鳩宮があった場所に8世紀に建てられた八角形の建物。太子をモデルにしたと伝えられる救世観音立像を安置する。金堂・薬師如来像の光背に刻まれた銘文によると、法隆寺は607年、推古天皇と聖徳太子によって創建された。「日本書紀」には、670年に火災で全焼したことが記録されている。明治時代、建築学者から「西院伽藍は飛鳥時代の古い様式だ」と再建を疑う説が出て、「再建・非再建論争」が起きた。しかし、1939年に西院伽藍よりも古い瓦

を伴う若草伽藍の跡が発掘され、若草伽藍の焼失後、西院伽藍が再建された可能性が高まった。ただその後も、金堂内に606年ごろに伐採された木材が一部使われていることが、年輪年代測定で判明。なぞは深まった。奈良芸術短大の前園美知雄教授(考古学)は「670年の若草伽藍の焼失は決定的だが、その前から西院伽藍の金堂などの建設が始まっていたという説もある。まだ完全決着とは言えない」と話す。

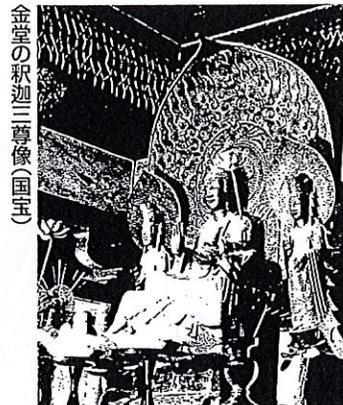
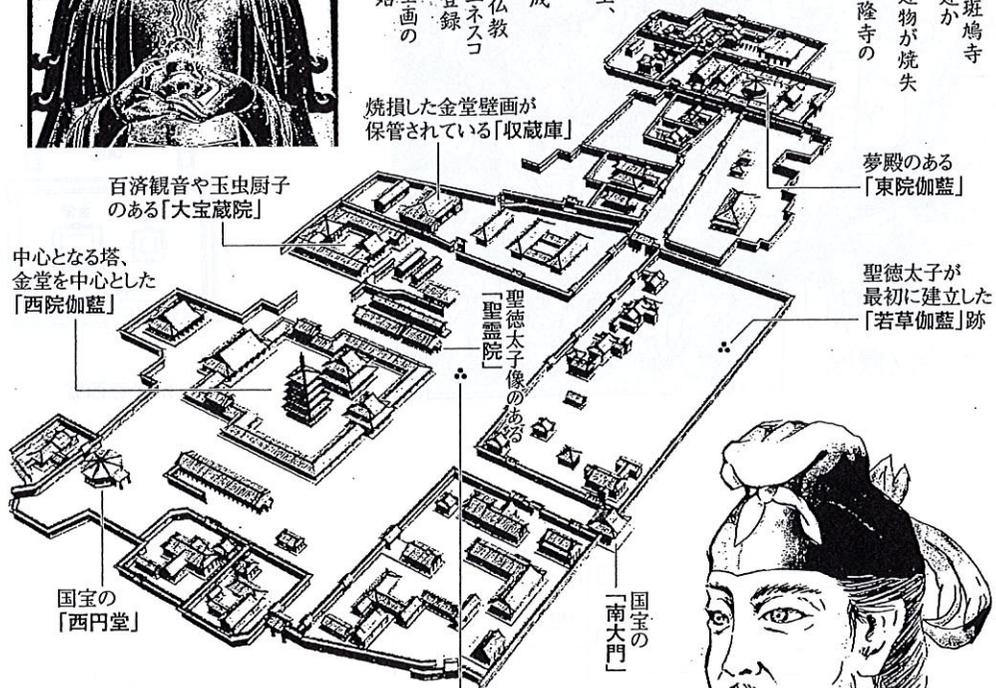
聖徳太子は622年に没し、その子で、舒明天皇と皇位を争った山背大兄王は643年、蘇我入鹿に攻め

文化財の宝庫 調査本格化

られて一族と自決。聖徳太子が興した上宮王家は滅びた。670年に焼失した法隆寺を再建したのは誰だったのか。前園さんは「当時の天武・持統天皇が援助したことは間違いない」とみる。法隆寺のある斑鳩は、大和各地からの川が大和川に合流し、国際港だった難波津へつながる水運の要衝。川沿いに多くの渡来系氏族が定住し、文化的先進地だった。「聖徳太子が斑鳩に宮を構えたのも、そのため。天武・持統天皇も当然、この地域に影響力を持つておきたかったはず」前園さんは、斑鳩周辺に拠点を持っていた豪族・山部氏にも注目する。山部氏は四国に勢力を持っていた久米氏から分かれたとされ、四国に法隆寺の荘園が多数あった。こうした氏族のネットワークと寺の関係を解明することも、再建の謎を解く鍵になりそうだ。(編集委員・今井邦彦)



夢殿の救世観音像(国宝)



金堂の釈迦三尊像(国宝)

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の「正岡子規句碑」



グラフィック・山中位行

1/24
札幌市時計台
元々は札幌農学校(いまの北海道大学の演武場)だった。時計台は現在も現役で、ねじなど消耗品以外は取り換えていないんだって。1時間おきに鐘が鳴るよ。
2225

読む

法隆寺の歴史については同寺の高

田良信(りょうしん)長老の著作が詳しく、昨年は『法隆寺学のススム』(雄山閣)が刊行された。仏像や建物など

見どころをビジュアルで紹介する本も『週刊仏教新発見01 法隆寺』(朝日新聞出版)など多数出版されている。

訪ねる

法隆寺の拝観料は中学生以上1500

円、小学生750円(西院伽藍と大宝蔵院、東院伽藍に入場可)。JRの法隆寺駅や王寺駅からバスが便利。

東隣の中宮寺(ちゅうぐうじ)は半跏思惟菩薩(はんかしゆいぼさつ)像で有名。